

横 顔
就任インタビュー

若手医師を育てる 誰一人取り残さずに

神戸大学の産科婦人科学分野に赴任以来、ロボット支援手術などの先進的医療の導入と普及に注力してきた寺井義人氏が2025年3月、教授に就任した。その経験と技術を教室運営にどう生かすのか、話を聞いた。

神戸大学大学院外科系講座
産科婦人科学分野

て ら い よ し と
寺 井 義 人 教授

1992年福井医科大学(現:福井大学)医学部卒業。米コロラド州立大学、大阪医科大学(現:大阪医科大学)産婦人科学教室准教授、神戸大学産科婦人科学分野診療科長などを経て、2025年から現職。

神戸大学大学院外科系講座 産科婦人科学分野
神戸市中央区楠町7-5-2 ☎078-382-5111(代表)
<https://www.med.kobe-u.ac.jp/obgyn/>

定型化・言語化で 手術指導を明確に

寺井氏は2018年、神戸大学に特命教授として赴任し診療と大学院生の教育を担当。20年からは診療科長・総合周産期母子医療センター長として若手医師を指導してきた。教授就任に当たって、「これまでのマネ

ジメントをより確実に実行していこう」と考えた。

寺井氏は婦人科腫瘍が専門。腹腔鏡手術やロボット手術を数多く実施してきた。国産初の手術支援ロボット「hinotori」の開発に携わり、22年12月には世界で初めてhinotoriで子宮体がん手術を成功させた。同大学医学部附属

病院にhinotori術者資格取得のトレーニング施設が設けられ、寺井氏は初代プロクター(指導者)の一人として、全国から訪れる医師の指導も担った。

どのようにしたら技術を伝えられるか。その指導法も磨いてきた。たどりついたのが「定型化」と「言語化」だ。「指導者ごとに違う教え

方で混乱させないこと。だれでも同じ条件、同じやり方で学べ、パーツごとに習得できることを重視しています」

昨今の診療現場は、主治医制からチーム制に大きく移行した。手術もチームで行うことが増えた。

「ベテランと若手がパーツごとに手術を分担することが増えました。医師の働き方改革に沿いますし、若手医師が手術を執刀するチャンスも増え、手術の安全性も保たれます。『定型化』と『言語化』によって、若手術者の技術もモチベーションも上がってきたと感じます」

一人一人と面談し 個別カリキュラム

寺井氏の教育方針のもうひとつの特徴が『個別性』の尊重だ。ひとつで若手といっても、独身者もいれば子どもがいる人もいる。意欲にも差がある。

「二人一人の希望をきめ細かく聞き、指導医と個別のカリキュラムをつくっています。働き方改革以後、学びの基本は自己研さんとなりました。ともすると、教室員内で大きく差がついてしまふ。手術動画の振り返り、ハンズオンセミナーなども数々用意し、状況を理解しながら、各人の『今やるべきこと』を確認します。だれひとり放っておかない教育を目指しています」

個別性を大事にしつつチーム力を高めることも欠かせない。そこで、メンバー全員がつながるSNSグループを開設した。『子どもが熱を出したので休みます』といった情報を共有し助け合う。助けてもらった次は助ける。いいチームワークをつくるために活用しています」

時間をどうつくる システム変更検討

後進の育成で今後の目標は「より広く深く」だという。学内から関連病院に出た医師たちの教育にも目を向け、「大学から離れてひそかに悩むことがないよう、個別に面接をして話を聞き、それぞれの目標に合わせたカリキュラムをつくってキャリアを支援します」。

働き方改革で時間をとりにくいなか、教室としての研究力をどう伸ばしていくかは「大きな課題」であり「模索中」と言う。「アフター5に自己研さんで研究しろ、というのでは意欲のある既婚者ほどつらくなります。外来や病棟に出る時間の間に週半日ほど研究に費やす時間を配分したらどうかなど、システムを変えることで研究を充実させる対策を考えています」

「これまでどおり」ではなく、時流をとらえ知恵を絞る。その姿勢はこれからも変わらない。